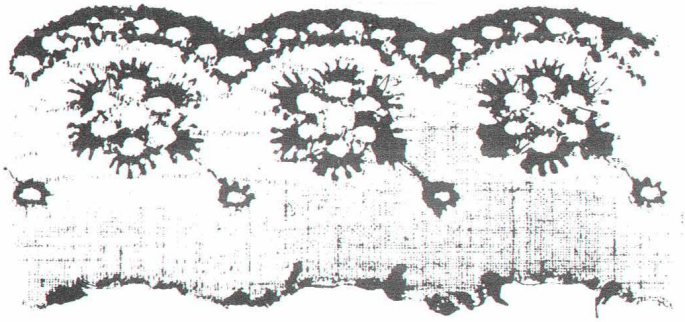
鶏肋断想



村野四郎

毎日新聞社

鶏肋断想（けいろくだんそう）

定価650円

昭和46年9月15日　印刷
昭和46年9月25日　発行

著　者　村野四郎
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
発行所　毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ツ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒802　北九州市小倉区紺屋町
〒450　名古屋市中村区堀内町

印刷／中央精版
製本／佐久間製本

© S. Murano
0095-667900-7904

序

鶏肋とは、にわとりのアバラのことだが「辞苑」をひくと、こんなふうに書いてある。

支那の後漢書の楊修伝によると、むかし魏の曹操が漢中を平らげ、洪備を討とうとしたが思うようにいかず、退いてその地をまもろうとしても見込みがないので、歌を出して「夫鶏肋食之、則無所得、棄之則如可惜」といったのに基づくとある。

つまり、食うほどの値打ちはないが、さりとて捨てるにはなんとなく惜しい気がする、というほどの意味だろう。

元来私の本業は詩人で、人生的感動のうちのこれはと思うものは、たいてい詩に書いてしまうけれども、時の流れにまかせて忘れてしまうには惜しいものもかなりあるような気がする。

ここにおさめた随想も、いわば詩の料理台の上の残物だが、捨てるには惜しい、なにかス－

ブぐらいになりはしないか、という希望をもってまとめたものである。

ところが、まとめてみて、このガラの嵩の膨大なのに驚いた。ずいぶん書いたものである。その中から約五分の一ぐらいを採って一本にした。

その選択や編集にあたっていただいた毎日新聞社図書編集部の石倉昌治君や石出和君の骨折りは大変だったと思う。感謝の意をしるしておきたい。

一九七一年　秋

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序……一

指宿の軽石

エレガントな気絶……一一
男のさびしさ……一四
湖畔の灌木林……一六
定刻……一九
美術について……二二
銀座の匂い……二七
都会の正月……三二
娘の人生……三六
癌研の道……三九
四月に思う……四三
名物……四六

校　歌……四八
たべもの考……五二
春　愁……五九
ドック記……六二
のんびりかあさん……六六
モグラに負けた話……六九
スポーツの周辺……七二
うなぎ……七七
指宿の軽石……八一
時は嚙む……八五
植物園界わい……九〇
武蔵野の四季……九三

春さきの詩論

詩人の死……一〇九
神なき信仰……一一四

貧血……一一八
葛飾時代の白秋……一二二
詩はアクセサリーか……一二六
詩人と書……一三〇
レフェリー出でよ……一三四
永遠なる芭蕉……一三七
短歌への郷愁……一四九
詩人の経済学……一五二
白秋の墓石……一五六
春さきの詩論……一六〇
私の好きな現代俳句……一六六
詩のむずかしさ……一七三

詩人の周辺

萩原朔太郎さんと私……一八三
室生犀星さんと私……一八八

三好達治のこと……一九三
安西冬衛の死……一九七
石川善助のことその他……二〇三
西脇順三郎先生のこと……二〇八
金子光晴の鬼について……二一四
草野心平とのつきあい……二一八
こおろぎのいる部屋……二二五
——『動物哀歌』序——
ウイリアムズの署名……二二八

生いたちの記

(一) 武蔵野の土の中から……二三九
(二) 詩の芽ばえ……二四二
(三) 文学的自覚の目ざめ……二四六
(四) 現代詩人として……二五〇
(五) 二足のワラジ……二五四
(六) 日曜作家……二五八

鶏肋断想

装幀　原田維夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

指宿(いぶすき)の軽石

エレガントな気絶

まだ暑い頃の朝のこと、寝床の中で眼をさましていると、子供部屋から起きたばかりの子供の声がした。

「おい、来てごらんよ。こいつ、死んだマネしていやがるぞ」

とんきょうな声である。何をしているのかと、いそいで行って見ると、寝間着のまま床の上に腹ばいになった子供が二人で、一匹の昆虫をつついている。米つき虫である。昨夜とびこんできて締めこまれてしまったものらしい。

米つき虫は仰向けにひっくり返ったまま、足をちぢめて、動こうともしない。しばらく子供たちと黙って見ていると、やがて敵がいなくなったと思ったのか、ふいにピコンとはね上がり、いそいでのこのこ逃げだした。

「ずるいやつだなあ、こいつ」と、子供はおもしろそうに笑った。人間のお株をとった小さい知

恵を笑ったのである。私も一緒に笑いだしたが、ちょっと考えた。

命をなくしたマネをすれば、もうそれ以上命をとろうとする者はいないだろうという論理は、かなり精密なものだが、果たしてあんな、あるかないかわからないような虫の脳の中に、そんな論理があるものだろうか、ということで、ことによると、あんまりびっくりしたので、本当に気絶したのではないか。むしろ、その方が自然のように思えてきた。

そういえば、狸のことで思いあたることがある。あいつのソラ寝や、ソラ死は、もう通説になっていて、そのために昔から狸はずるいヤツの代表者のようにされてしまっているが、ある動物学者の説で、あの通説は間違いだということを、どこかの本でよんだことがある。

ずるいどころか、狸ぐらい気の弱い動物はない。びっくりすると、すぐ本当に気絶してしまうのだそうである。

人間たちは、この息もたえだえになったやつを取りまいて、ソラ死だと決めて監視しているわけだが、やっと息を吹返した狸が、もう少し利口で、もしこの残酷な無実の論告を知ったら、そのショックで、また気絶してしまうかもしれない。

人間たちは、自分がずるいので、それを他の動物にまで類推して、罪の気やすめをしているようなところがあるが、ずるさの点では、どんな動物でも、とても人間にかなうものではない。そ

のずるさの力で、わずかに万物の霊長たりえているに過ぎない。

その人間の気絶については、慶大のお医者で作家のK氏から、最近聞いた話だが、私たちは映画などでよく外国婦人がほんのちょっとしたショックで、額に手をあてながらベッドやソファの上に、ひっくりかえる情景に出会うが、ああした失神の表現は、外国婦人のタシナミの一つだそうである。たしかにあのように優雅な気絶のポーズは、日頃の修練によらなければ、そうざらに出来るものではない。やがて香水か何かをひっかけられて、弱々しく眼をひらく彼女たちの演技は、大したもので、まさに文明の精華である。

「人間は汚い犬である」と口のわるいボルテールが言ったり、ドイツの風刺詩人のケストナーだったかも「人間は猿よりも猿だ」と言ったが、ずるさにおいては、人間は「狸よりも狸である」などという程度ではない。「比較のない狸」なのである。

——あれこれ、ぼんやり考えていたら米つき虫も子供も、みんなどこかへ行ってしまった。

男のさびしさ

いつだったか、知合いの女の科学者と、男という人間の種類について話したことがあった。どういうキッカケで、そうした話になってしまったのかよく思いだせないが、とにかくこの老嬢は、男のようにこわい半白の髪をかきあげながら、ひとの顔をのぞきこんで、こんなふうに言った。

「これはべつに、あなたに限りませんよ。男というものを、じっと見つめていると、なんだか非常にさびしい生きものに見えてくるね。どこがどうということはないんだけど、なにか寒冷地の生きものみたいで、うしろ姿なんか、とてもさびしいな」

そう言われると、男の私にも、そんな気がしてきて、この老嬢がとくに男をナメているという気持は少しもしなかった。

彼女の説によると、この非運の影みたいなものが、じつは女にとって、本当の男の魅力なのだそうである。私は彼女の卓説を聞きながら、ふと、いつか西脇順三郎という詩人が、ある本の中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com